

霊符——夢想封印 散」

これは霊夢の最も得意とするスペルカード。ここでスペルカードを出すのは早くはななかりうかと幽香は思うが、それほど必死にならざるを得ないのか、それともただ単に面倒くさいだけなのか。彼女のことから、後者である可能性は極めて高いのだが。

霊夢の放った弾は、すでに放たれている幽香の弾幕を一つ一つ丁寧に撃ち落としていく。夢想封印とは相手をどこまでも追跡して弾を叩き込む豪快で容赦のないスペルカードだと記憶していたが、なるほど、こういう使い方もできるのか、と幽香は感心する。

「でも……:だけ撃ち落としてもそれじゃ追いつかないわよ！」

また左手で空を薙ぐ。それを合図にまだ残っていた弾が拡散する。

これですべての大弾がはじけたことになる。拡散した弾は軽く見積もっても数百。とても霊夢に処理しきれぬ量ではあるまい。これで決まった、と幽香の口元が少し釣り上がる。

が、その期待は簡単に裏切られた。

「霊符——博麗幻影」

その宣言と同時に霊夢の周りに、数えきれないくらいの札が浮かび上がる。その数に恐怖を覚えつつ、なぜか官能的な気分にもなった。

これだ。こういう戦いがしたかったのだ。幽香はにやりと笑う。自分の体に電気のようなものが走る感覚を覚える。

「つたく……手間を取らせないで。これで終わりよ！」

その言葉と同時に周囲に浮かんだ札が飛び、先ほど撃ち落とし損ねたものと、新たに生まれた弾、そのすべてを撃ち落とし、その先に立つ幽香へと向かっていく。

「それでいいわ。それでこそ戦いは面白いのよ……」

その眼は狂気に近い、嬉々とした眼差し。どくどくと全身を血液が異常な速さで駆け巡るのを感じる。身体中が熱を持つ。これが戦いの中に自分を置くことの喜び。自分の中のサディスティックな感情とマゾヒスティックな感情が交差する。戦闘狂というものはこういうものではないかと幽香は思う。

「幻想——花鳥風月、嘯風弄月」

霊夢が本気であることを身を持って知り、自分も本気で答えるのが戦闘における相手への礼儀だとして、自分の最大のスペルカードをぶつけることにする。

宣言をすると、手にした傘の前に突き出す。すると無数の弾が傘の先から発射される。

これは、彼女が苦手とするスペルカードルールの中でも、唯一本気で練った、いわゆる必殺技のようなもの。過去にでたらめに使っていた自分の力を再び構築し、より綺麗に見えるようにした。そうすると、苦手な自分であってもそれなりに楽しくはなってくるもので、結局出来上がったスペルカードは、彼女が誇れるものになった。一言で表すのならば、咲き誇る花、であろう。

「もう、だからあんたとやるのは嫌なのよ。戦闘好きもそこまで行くとは病気よ……」

そう言うと、霊夢はキツと歯を食いしばり、自分のスペルカードの展開に全力を込めることにする。展開し続ける札は尚も幽香を目指していく。

博麗霊夢も風見幽香のことをよく知っている。はつきりいって、彼女は面倒くさい妖怪だった。見て分かるように戦闘という行為に誇りを持っている。それは非常に狂气的であり、その点では妖怪の鑑のような女性である。だが、それ故に人間に対しても、弱い妖怪に対してもまったく容赦がないというのは問題である。彼女に殺された人間や弱い妖怪は数知れず、人間と妖怪の間に存在する一つの壁を崩しかねない存在でもある。だから、これ以上彼女を野放しにしておくわけにもいかない。まして、今回は再び異変の中心にいるのだから。

「まったく……本当、昔からあんたは面倒なのよ」